

# 亀ヶ崎城跡

## 第3次発掘調査報告書

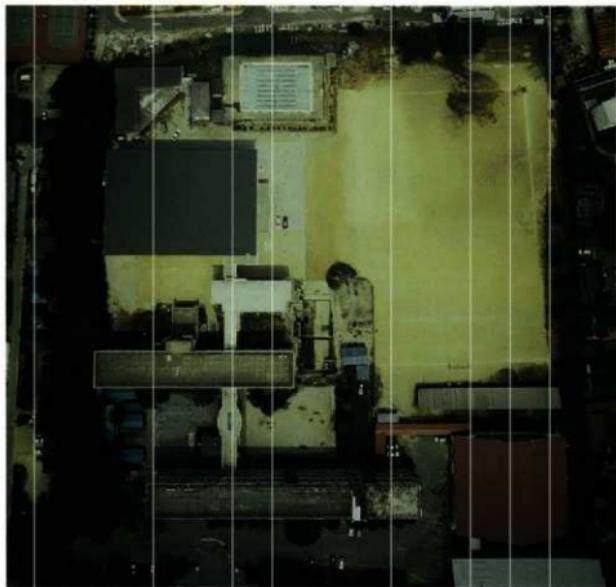
1995

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

かめ が さき じょう あと  
**亀ヶ崎城跡**  
第3次発掘調査報告書

平成7年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



亀ヶ崎城本丸、二の丸部分（空中写真）



調査区全景（南方上空より）



54



51



56



55

出土磁器 54 51  
56 55



46



50



47



30

出土磁器 46 50  
47 30

## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、亀ヶ崎城跡第3次の調査結果をまとめたものです。

亀ヶ崎城跡は山形県の北西部に位置する酒田市にあります。酒田市は庄内地方の中核都市、とりわけ日本海に面する港町として、環日本海交易とともに発展してきました。

調査では、本丸と二の丸の間を隔てる内堀の一部が発見され、貞亨年中亀ヶ崎城絵図に基づいて発掘現場の位置が特定できました。堀の内及び付近からは主に日本海での船による交易によってもたらされたと思われる多量の陶磁器が出土しており、江戸時代の生活文化を色濃く反映させています。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産と言えます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県などの事業が増加していますが、これに伴い事業区内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に答え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センターの発足の目的が達成されるようご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成7年3月

財団法人山形県埋蔵文化財センター

理事長 木場清耕

## 例　　言

1 本書は山形県立高等学校校舎等整備事業に係わる「亀ヶ崎城跡第3次」発掘調査報告書である。

2 調査は山形県教育庁文化財課の調査を経て、教育庁総務課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記の通りである。

　　遺跡名　　亀ヶ崎城跡（ASTK-3）　　遺跡番号　2071

　　所在地　　山形県酒田市亀ヶ崎1-3-60

　　調査期間　　発掘調査　平成6年4月1日～平成7年3月31日

　　　　　現地調査　平成6年6月21日～平成6年8月12日

　　調査主体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター

　　発掘調査・資料整理担当者

　　調査研究課長　　佐々木洋治

　　主任調査研究員　　佐藤　庄一

　　調査研究員　　小関　真司

　　調査研究員　　山口　博之

4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県教育庁総務課、山形県土木部建築課、庄内支庁建設部建築課、山形県立酒田東高等学校、酒田市教育委員会、庄内教育事務所等関係機関の協力を得た。船越行雄氏には所蔵の絵図を快く見せていただき、様々なご教示を頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

5 本書の作成・執筆は、小関真司が担当した。編集は尾形與典、須賀井新人が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。

6 遺構平面図については、株式会社シン技術コンサルに実測業務を委託した。また出土した動植物遺存体と種実については株式会社パレオ・ラボに自然科学分析を委託して報告を受けた。

7 出土遺物・調査記録類は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下の通りである。

S D……溝跡 S K……土壙 R P……完形・一括陶磁器、土器

RM……金属製品 R Q……石製品 RW……木製品

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記の通りである。

(1) 調査区概要図・遺構配置図中の方位は磁北を示している。

(2) グリッドの南北軸は、N-38°-E を測る。

(3) 遺構実測図は1/40、1/80、1/100、遺物実測図、拓影図は1/2、1/4、1/8縮図で採録し、各挿図ごとにスケールを付けた。実測図内のスクリーントーンは木材および石を表している。

(4) 本文中の遺物番号は、遺物実測図、遺物観察表、遺物図版とともに共通にした。

(5) 遺物観察表中( )内数値は、図上復元による推計値、また残存値を示している。

また出土地点欄の層位は遺跡を覆う土層（基本層序）を表している。

(6) 遺構覆土及び一部遺物の色調の記載については、1993年度版農林水産省水産技術会議事局監修の「新版標準土色帖」によった。

(7) 遺物観察及び測定にあたっては、東京都新宿区細工町遺跡報告書凡例基準などを参考とした。

## 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	2
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
III 検出された遺構	
1 遺構の分布	5
2 S D 1 堀跡	5
3 その他の遺構	6
IV 出土した遺物	
1 遺物の分布	9
2 陶器	9
3 磁器	9
4 土器、土製品	10
5 金属製品	10
6 石製品	10
7 木製品	10
8 その他の遺物	10
V 調査のまとめ	17
報告書抄録	18

## 挿 図

## 付 表

第1図 遺跡位置図	1	表1 亀ヶ崎城の変遷	4
第2図 調査概要図	2	表2 亀ヶ崎城城代存任一覧表	4
第3図 遺跡の層序	5	表3 出土遺物観察表(1)	15
第4図 堀跡(SD1)断面図	5	表4 出土遺物観察表(2)	16
第5図 貞享年中亀ヶ崎城図	6		
第6図 遺構配置図	7		
第7図 出土古鉄拓影図	7		
第8図 中央トレンチ断面層序	7		
第9図 SK4土壤	7		
第10図 出土遺物実測図 陶器		11	
第11図 出土遺物実測図 磁器		12	
第12図 出土遺物実測図 磁器、金属製品、土製品、石製品		13	
第13図 出土遺物実測図 石製品、木製品		14	

## 図 版

巻頭図版1 亀ヶ崎城本丸、二の丸部分 調査区全景

巻頭図版2 出土磁器

図版1 堀の根がため杭列 堀の断面層序

図版2 中央トレンチ断面層序 堀の根がため杭としがらみ 木の根と木舞  
旧制酒田中学校校舎土台 調査作業状況図版3 SK4土壤 西側壁材と柱材 RP16土人形出土状況  
RP11皿出土状況 RM12槍身出土状況 RM6-1~10古錢出土状況  
RW36木挽出土状況 現地調査説明会状況

図版4 陶器

図版5 陶器 磁器

図版6 磁器 土器 土製品

図版7 金属製品 土器 土製品 石製品

図版8 木製品



## 1 調査の経緯

### 1 調査に至る経緯

日本海に面する海上交易の要衝として古くから栄えてきた酒田のまち。その中核として南北朝期より亀ヶ崎城（東禪寺城）が築かれていた。幾多の戦禍や時代の激動を体験してきた城域は明治維新後酒田県庁、旧制酒田中学校さらに県立酒田東高等学校の敷地となって、現在に至っている。

昭和63年酒田東高校の校舎等整備事業に伴う分布調査が行われ、明治期と江戸期の少なくとも2時期の文化層が確認された。その結果に基づいて行われた平成2年度の第1次発掘調査（特別教室棟建設）では、江戸時代の陶磁器等の生活用具が数多く発掘された。平成5年度には第2次調査（体育館建設）が行われ、貞亭年間の絵図に残る城代家老の屋敷と考えられる地点から陶磁器、土人形等が数多く出土し、その当時の上級武士の生活の様子が垣間見られた。また肥前産の陶磁器の多さは、日本海を通じての交易の活発さ、豊かさを感じさせた。

平成6年度は実習室棟の整備が計画され、山形県教育庁文化財課は山形県教育庁総務課と協議の結果、建設予定地点について第3次緊急発掘調査を行うことで合意した。酒田東高、県土木部建築課、庄内支庁建設部建築課とも事前打ち合わせ会等で調整をはかり、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った。



第1図 遺跡位置図 (S = 1 : 100,000)  
国土地理院発行5万分の1地図「酒田」縮小

- 1 亀ヶ崎城跡
- 2 明日山城跡
- 3 山橋城跡
- 4 梶橋館跡
- 5 河内城跡
- 6 砂越城跡
- 7 田尻館跡
- 8 松山城跡

## 2 調査の経過

第3次発掘調査の現地調査は平成6年6月21日から平成6年8月12日まで、延べ38日間行われた。第1次、第2次調査の調査区設定基準を踏襲し、2m×2m単位のグリッドを校舎建設予定地に設定した。以下に調査の経過を略述する。

6月21日 機材搬入。調査安全祈願。調査区環境整備。事前に表土除去(50cm)を行った部分が湧水で水没しておりポンプによる排水作業にかかる。トレーナーを入れ層を調べる。

6月23日 重機導入。水が引かず面整理が進まない。排水溝を周りに掘る。

7月4日 第1文化層(旧制酒田中学校校舎)検出、精査。

7月12日 第2文化層検出。江戸末から明治初期の埋め立て跡か。南東側に遺物集中地点発見。本丸、二の丸間の内堀と判断。掘り下げを決定。同時に西側より槍身、木材など出土。

7月25日 埋め立てられたと思われる多量の木部材が出土。第3文化層。調査期間を考慮し西半分と烟跡に調査を集中させる。西端より壁材出土。

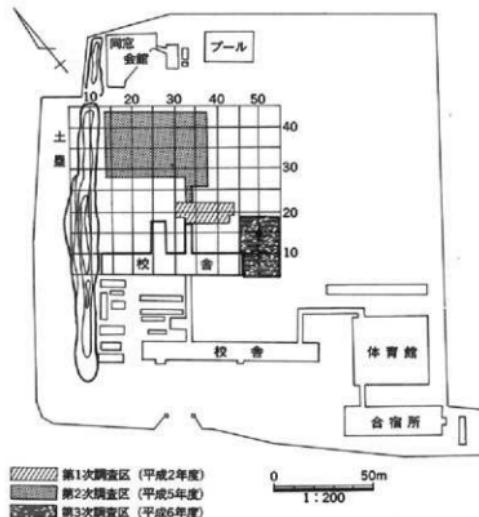
7月27日 西側に根木確認。江戸時代の第4文化層を考え面整理。下駄等多数出土。

7月29日 烟法面内より根固め杭列、しがらみ出土。中央部に東西トレーナー掘削。

8月4日 調査区造構空中撮影。現地説明会準備。西側第5文化層。

8月5日 調査成果を公表する現地調査説明会を開催。(参加者約70名)。引き渡しのための現地確認も同時に行う。(県教育庁総務課、庄内支庁建設部建築課、酒田東高立会)

8月12日 現地調査終了 撤収



第2図 調査概要図 (S = 1 : 200)

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

山形県の日本海沿岸には米所庄内平野が広がっている。酒田市は鶴岡市とともに庄内地方の中核都市の位置を占めているが、とりわけ日本海に面する港町として、海上交易とともに発展してきた。気候的には日本海の影響を受けており、山形県内としては寒暖の差が小さく積雪も少ないが強風の吹く日が多い。

吾妻山系を源とし山形県内を流れ下ってきた最上川は、中小河川を集めながら庄内地方に広大な冲積平野を形成し、酒田市市街地の南部で日本海に注ぐ。一方出羽山地より発した新井田川は、最上川と河口近くで合流し三角州を形成している。この三角州状の自然堤防上の微高地に亀ヶ崎城は立地し、標高はおよそ3mを測る。城城は新井田川をはさんで左岸が本丸と二の丸、右岸が三の丸と配されており、水城的性格の強い堅固な平城である。

現在本丸と二の丸を含む地域は大部分が県立酒田東高等学校の敷地となっているが、一部は宅地になっている。現在も酒田東高敷地西側には南北170mに渡って土壘が現存しており、年輪を重ねた樺の大木が数多くそびえている。この土壘の中央部付近には、貞亨絵図に書かれている物見台の張り出しが残っている。また酒田東高前や酒田商高付近の道路等に、城の縄張りが感じられる。

### 2 歴史的環境

酒田は室町時代以前は坂田村と呼ばれていた。酒田市街地北東部には、平安時代の出羽の国の国府と推定されている国指定遺跡「城輪柵跡」が存在しており、古くからの中央との交流をうかがわせる。舟運によって内陸と結ばれている最上川の河口を開け、巨大な穀倉地帯庄内平野を背後に抱えた港町酒田は、常に様々な勢力の攻防の場となってきた。

この地にいつごろ城が築城されたかについては諸説があるが、かつて四ツ興野にあった東禅寺城を文明10年（1478）遊佐太郎繁元が、地勢を利用し現在地に築城したといわれている。関ヶ原の戦いの際に上杉方の立てこもるこの城を、最上の大軍が容易に落とせなかつたという逸話が、その堅固さを物語っている。堀と土壘で囲まれた純曲輪のこの城は、その形から巴城とも呼ばれていた。

湊町である酒田は最上川左岸の向酒田の時代から、酒田三十六人衆による町政が行われており、右岸の当酒田移転の後も問屋や商人たちが活躍し、自治機能が続いている。しかし上杉、最上と続く戦国大名の支配権力の強化の中で、その機能は統制の中に取り込まれていった。そして元和8年（1662）三河以来の徳川の重臣酒井忠勝庄内入部の頃には、幕藩体制の支配行政機構の一部と化していた。出羽庄内藩の始まりである。

酒井家は鶴ヶ岡城を本城とし亀ヶ崎城は支城として城代を置いた。初代の城代は藩主の叔父松平甚三郎である。城代及び行政の責任者の町奉行が中心となって治安維持のみならず酒田湊の権益保護と統制にも権限を持っていた。三十六人衆もその一翼を担う形で存続していた。城そのものの規模は縮小され、城下町分と湊町分の境界は取り払われていった。

表1 亀ヶ崎城の変遷

不	祥	今の酒田市西ノ興野付近に大津山東禅寺と称する真言宗の寺が建つ。一勢力團を形成し、東禅寺城または酒田城と呼ばれる。長は東禅寺氏または酒田氏。
1466	文正1	佐佐大橋城主佐氏が、東禅寺氏を攻める。酒田太郎繁元、東禅寺城主となる。前後にして東禅寺城、大洪水に押し流される。
1467	文正2	応仁の乱始まる。(~1477)
1478	文明10	繁元、東禅寺城を現在地(酒東敷地)に移築したとされる。
1512	永正9	東禅寺合戦。大宝寺武藤氏と砂越氏が東禅寺城で戦い、武藤氏敗れる。
1538	天文7	武藤晴時、東禅寺城と砂越氏を攻め川北を治める。東禅寺氏滅び、武藤氏一門を以て繼ぐ。
1582	天正10	本能寺の変。国内再び無統制。
1583	天正11	武藤老臣前森成人、殿上義光と通じ尾浦城を攻め、武藤氏自刃する。前森成人、東禅寺城主前守宇を名乗ったとされる。
1584	天正12	義氏の弟武藤義興、上杉景勝と結び庄内制に努める。上杉・武藤氏と敵上、東禅寺氏の庄内争奪の様相強まる。
1587	天正15	東禅寺守が反乱。尾浦城落城、武藤義興自刃する。
1588	天正16	義上義光と伊達政宗の対立深刻化。上杉方の本庄繁長、庄内に進攻、五里ヶ原の合戦。東禅寺筑前守討死。繁長、東禅寺に入城。武藤義興の跡目で繁長の二男、武藤義勝、出羽國主となる。庄内は実質、上杉支配下となる。
1590	天正18	秀吉の命で上杉景勝、出羽国内の領地を開拓。
1591	天正19	秀吉、本庄繁長・武藤義勝の所領没収、上杉に与える。東禅寺城代に河村彦左衛門。
1591	天正19 	城主甘粕信後守、大町謙を据る。
1596	慶長1	
1599	慶長4	志田修理亮義秀、東禅寺城主となる。川村兵蔵、平城としての東禅寺城を整備する。
1600	慶長5	岡ヶ原の戦。岡ヶ原出羽守も始まる。
1601	慶長6	最上義光、上杉景勝の東禅寺城を攻め庄内を制する。亀ヶ崎城主3万石に志村伊豆守。
1603	慶長8	徳川家康征夷将軍となる。義光、東禅寺城を亀ヶ崎城、大宝寺城を鶴ヶ岡城に改称。
1611	慶長11	亀ヶ崎城主志村伊豆守没する。九郎兵衛光惟跡を繼ぐ。
1614	慶長19	最上義光没する。九郎兵衛光惟、鶴ヶ岡城方に移設される。
1615	元和1	徳川秀忠一城の制を定める。庄内では、鶴ヶ岡城と亀ヶ崎城の二城が特に許される。
1622	元和8	最上氏改易される。酒井忠勝、庄内に入部。(14万石)。亀ヶ岡城を本城、亀ヶ崎城を支城とする。亀ヶ崎城代に忠勝の叔父松平基三郎が当たる。町奉行1名頭領2名平氏20名。このころから、亀ヶ崎城三の丸は、待屋敷が取り壊され、町割に組み込まれる。
1627	寛永4	6月21日亀ヶ崎城にて出火。城内を全焼する。
1672	寛永12	前年の東通り航路開発に続き、兼上暴利水が西通り航路で初出船する。
1684～1684	(貞享年中)	
1713	正徳3	「續年私記」に、この年、酒田城代屋敷建つの記録がある。
1804	文化1	6月4日大地震発生。亀ヶ崎城大破、大手橋折れる。城代宅等全壊家屋一千軒を越す。
1868	明治1	戊辰戦争。(~1869)。庄内藩主酒井忠篤開城降伏。酒田に軍務官出張所、民政局を設置。
1871	明治4	廢藩置県。酒田は大泉県を経て酒田県となる。旧亀ヶ崎城内に県庁を置く。
1875	明治8	県令三島通庸「鳴鶴学校」開校。11月に亀ヶ崎城跡に移る。
1880	明治13	城内建物を民間に払い下げる。その後建物を取り壊し畑地とする。
1920	大正9	県立酒田中学校敷地となる。(現在の県立酒田東高等学校)

表2 亀ヶ崎城代在任一覧表

城代氏名	在任期間
松平 善三郎	元和8 1622 寛永6 1629
白井 憲右エ門	寛永6 1629 寛永8 1631
松平 善三郎	寛永8 1631 承応1 1652
松平 九郎兵衛	承応1 1652 万治1 1658
松平 藤兵衛	寛文10 1670 元禄16 1703
松平 善三郎	享保17 1723 元文4 1739
酒井 国書	寛延1 1748 宝暦1 1751
松平 善三郎	宝暦1 1751 宝暦8 1758
酒井 国書	宝暦13 1763 安永6 1777
竹内 五兵衛	安永10 1781 寛政7 1795
酒井 内匠	寛政7 1795 寛政11 1799
酒井 吉之允	亨和2 1802 文化7 1810
酒井 弾正	文化8 1811 文化10 1813
里美 外記	文化10 1813 文化13 1816
松平 武右エ門	文化13 1816 天保5 1834
杉山 弓之助	天保12 1841 天保14 1843
松平 善三郎	弘化2 1845 弘化3 1846
酒井 奥之助	弘化3 1846 弘化4 1847
服部 蕃兵衛	嘉永2 1849 嘉永5 1852
松平 舎人	嘉永6 1853 安政6 1859
酒井 奥之助	安政6 1859 安政7 1860
加藤 宅馬	安政7 1860 慶応4 1868
朝岡 助九郎	慶応4 1868 明治2 1869

資料 酒田市史改訂版上巻より

### III 検出された遺構

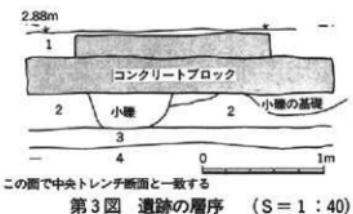
#### 1 遺構の分布

腐敗臭の強い表土を剥ぐと、大きなコンクリートブロックとすぐ下に丸石を使った基礎の列が表れた。戦時中軍需工場となった際据え付けられた旋盤とのことであり、基礎は旧制灘田中学校校舎のものと考えられる。(ここまでI層)旧制灘田中学校校舎の棟瓦が多数出土した。(第3図・図版2)以下地表面より150cmまでII層。150cm付近より遺物が集中する堀跡が検出。(III層)同じ層位よりSK4検出。やや下から埋め立てに使われたと思われる柱材出土。160cm~190cm(IV層)木の根出土し文化層確認。木舞等SK4より出土。以下地表面より235cm(V層)、250cm(VI層)、290cm(VII層)となる。常に地下水の湧出があり土は常に多量の水分を含む状況であったが、堀跡に近いところは固く締まっていた。地表面より300cmになると堀の底付近より鉄分を多量に含んだ赤茶色の水が湧出し、メタンガスのような臭いが感じられた。

#### 2 SD1堀跡(第4、6図・図版1)

調査区の南東部、53~54-6~16グリッドIII層より検出され始めた溝跡である。陶磁器等の遺物が調査区東側に集中し、南北に帯状に広がることが確認された。絵図記載の間数等から本丸と二の丸を隔てる内堀であることが考えられた。精査していくと法面に沿って生えていた植物が青く残っている面が現れ、おそらく明治期に一気に堀を埋め立てた名残と考えられる。堀の構築状況を調べるために法面にトレンチを入れたところ、根固め杭が出土した。調査した部分からの統計は54本となった。杭は径18cm~8cmで六角、四角等の面取り材が多いが皮付き材も見られる。鋭く削られた先端部等には腐敗防止のための人工的な焦がし跡も見られた。杭を精査していくと杭から法面に向かって葦を束ねて作ったと思われるしがらみが残っているところがあった。杭の周りの土を固定するためのものと考えられる。杭列の根元付近より珠洲焼片が出土しており、堀の造成は16世紀以降と考えられる。検出した堀跡はグリッドに対して(すなわち現在の校舎に対して)やや斜めに延びている。貞亨絵図はまっすぐに書かれているが、現存する絵図の中にやや斜めに堀が描かれている。

堀の位置について新たな発見と考えられる。

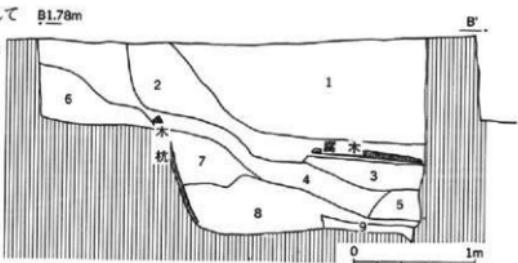


第3図 遺跡の層序 (S = 1 : 40)

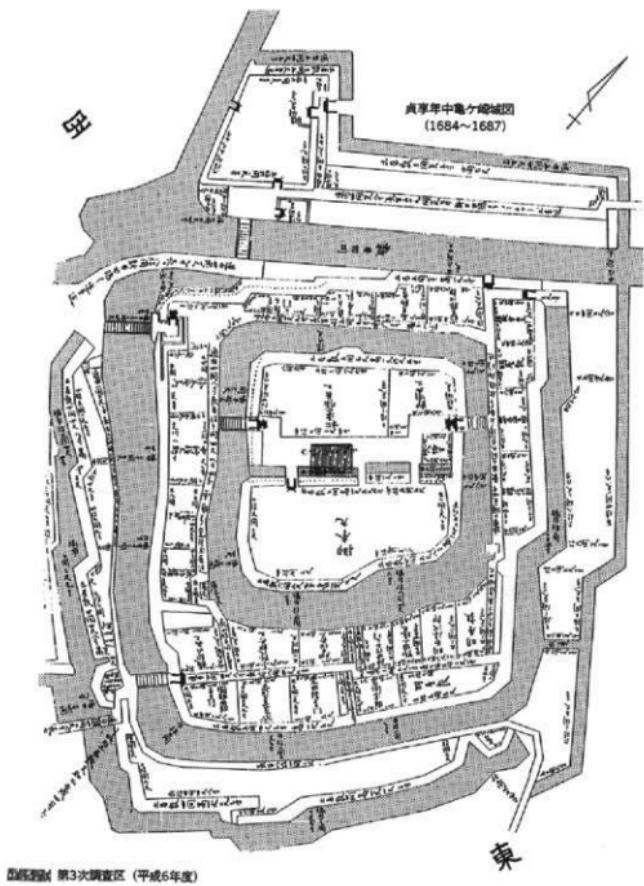
いるものがあり、堀の位置について新たな発見と考えられる。

- 順序記号  
 1 棕色土砂同質 地面以下  
 2 黒褐色土 布めた リサイクル片などが混じる  
 3 黒褐色土 布めた 有機物の混じる褐色土  
 4 黒褐色の土の塊

- 順序記号  
 1 Y-1/1 グリーンセメント 地盤、底面付、遺物を多量に含む  
 2 Y-2/1 フィーナー黒褐色土 地盤、有機物を多量に含む  
 3 Y-3/1 グリーン黒褐色土 黒褐色土、木片を多量に含む  
 4 Y-4/1 黒褐色土  
 5 Y-5/1 黒褐色土、有機物、有機物を多量に含む  
 6 Y-6/1 黒褐色土、有機物、有機物を多量に含む  
 7 Y-7/1 黒褐色土、木片、木の根を多量に含む、地盤土を少含む  
 8 Y-8/1 グリーン黒褐色土、有機物、木片、黒褐色土を含む  
 9 Y-9/1 黒褐色土、有機物



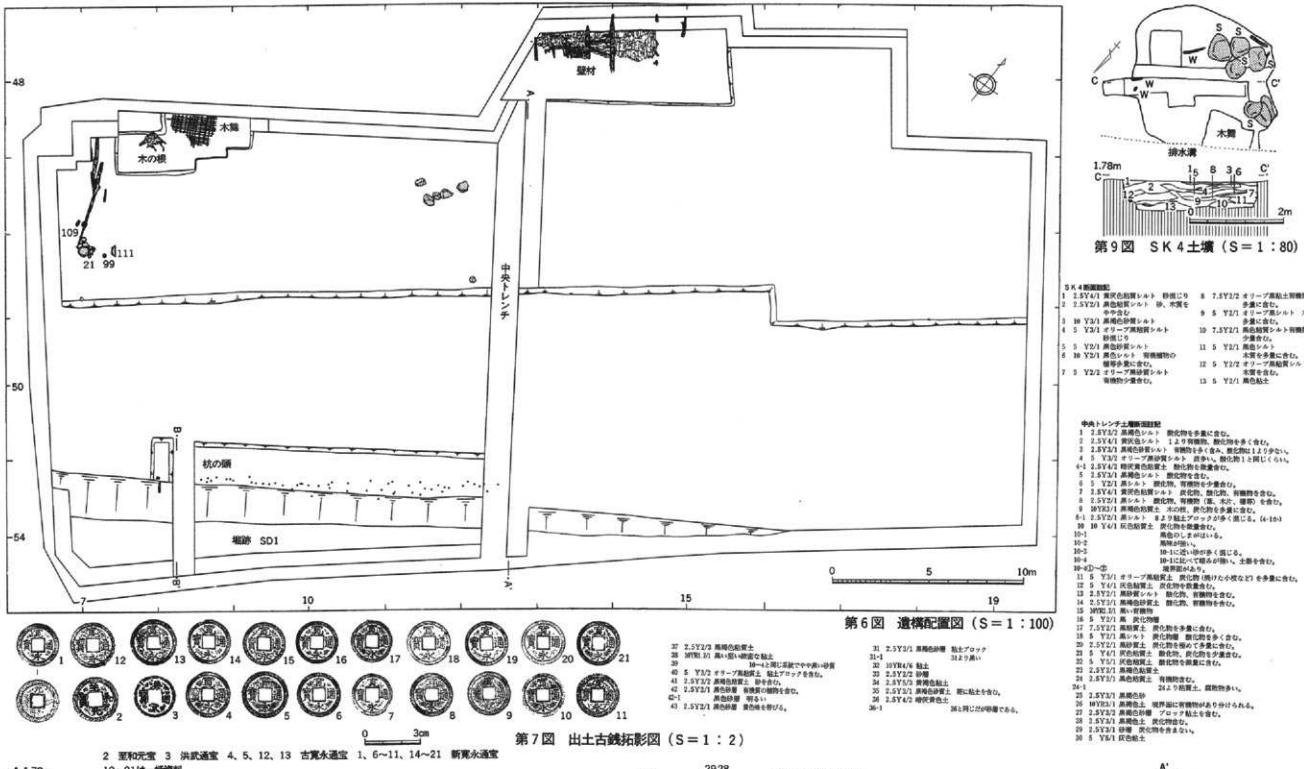
第4図 堀跡断面図 (S = 1 : 40)



第5図 貞享年中龜ヶ崎城図

### 3 その他の遺構

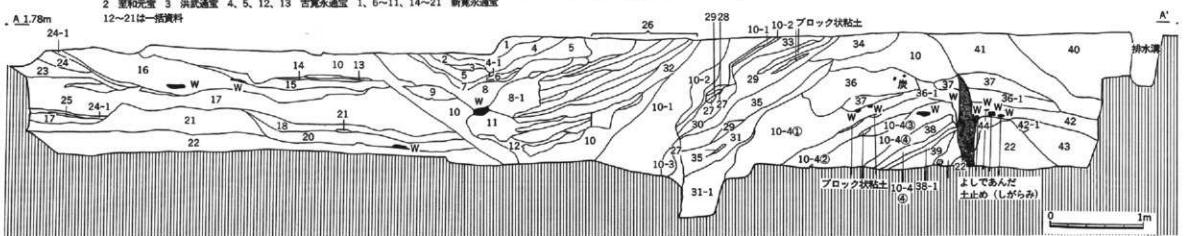
S K 4 は48~49-10グリッドIII層から検出され始めた土壌である(第9図)。ごみ穴的で多数の木材片、瓜、桜の種、径30cm程の丸石7個などが出土した。排水溝側(IV層)からは木舞がはっきりした形で検出され、壁が埋められた跡と考えられる。47~48-13~15グリッドIII層からも明らかに倒して埋められた壁跡と思われる杭が見え始めV層まで続いていた。(第6図)IV層目では杭の間に壁跡の藁が続いている部分が検出された。49~50-18~16グリッドIV層には埋め立てに使われたとみられる柱材が人為的に組まれた状態で出土した。(図版3)



## 6 図 遺構配置図 ( $S = 1 : 100$ )

第7図 出土古錢拓影圖 (S = 1 : 2)

0 3cm



第8図 中央トレンチ断面層序 (S=1:40)

## IV 出土した遺物

### 1 遺物の分布

出土遺物は陶磁器、土器、土製品、金属製品、石製品、木製品と多岐にわたり、整理箱にして46個を数える。そのうち24個が陶磁器である。そのほかに遺構より出土した杭、柱材などが78本ある。遺物集中地点はおよそ2ヵ所に別れる。調査区東側SD1堀跡内が最も遺物が多い。うち上層の遺物は明治初期埋め立て時に一気に入り込んだものと考えられる。一方調査区の西側48~51-7~8グリッドを中心として木製品が多く出土した。西側はその地点以外でも地層内の水分含有量が多く木製品や魚鱗等が広く出土している。全体としては1662年(元和8年)酒井氏入部以降の江戸時代を中心とする遺物である。なお遺物の器種、器形分類については基本的に亀ヶ崎城跡第2次調査報告書に従っている。碗の大中小は120mm、100mmを、皿の大中小は250mm、120mmをその境界とした。以下種類別に主な遺物についてその特徴などを記述する。

### 2 陶器(第10図・図版4、5)

碗、皿、猪口、鉢(擂鉢、練鉢を含む)、盤、甕、壺、水注、土瓶、土鍋、油徳利、花生け、飯事道具が出土している。3、4、5は中国産の青磁である。小鉢(13)は口縁部内側に多数の打痕があり、灰落として使われたと考えられる。白化粧土で回転刷毛目装飾を外面に施し、胴の縁と鉄の褐色釉を使用している。現川焼きと思われるが有田の可能性もある。碗(15)は京焼風陶器と呼ばれるもので、底部は無釉、高台部分は断面角形に削られその中は平滑である。部分破片であるため印銘は確認されない。大鉢(17)は18世紀前半に盛行した刷毛目唐津である。高台断面等に京焼風陶器の影響が見られる。大皿(18)の高台内には墨書きがある。擂鉢(21)は使い古されて底が抜けている。産地は不明である。なお擂鉢は10点程出土しているが掲載は2点にとどめた。(22)は越前系の甕で壺の底近くより出土しているが、火を受けた痕跡がある。花生け(23)には蛇と思われる飾りが付いている。この飾りの対角の部分にも飾りの付けられていた跡が残っている。

### 3 磁器(第11、12図・図版5、6)

碗、小壺、皿、猪口、鉢、盃洗、蓋、甕、壺、徳利、戸車、花瓶、急須、香炉、水滴、燭台、植木鉢、飯事道具、紅口等が出土している。磁器は江戸初期中国系が入っているほかは、長く肥前産の独占市場で、19世紀初頭瀬戸が染付生産に参入する。今回の出土数も肥前系磁器の割合が高い。碗は丸形(25、27、28、29、32)と端反形(26、30、33、34)に分けられる。肥前系磁器にあっては端反形が流行してくるのは18世紀後半である。用途としては大碗は飯碗、抹茶碗として、中碗は飯碗、抹茶碗、煎茶碗として、小碗、小壺は湯飲み茶碗、煎茶碗、酒杯等としての使用が考えられる。碗(31)は青磁染付で、見込みに五弁花コンニャク版、高台内にかなり崩れた「太明年製」銘がある。飯事はハレの日野外で行った食事が子供の遊びに取り入れられていったといわれている。飯事道具(42~44)は記録に残らない子供たちの暮らしぶりを今に伝えている。蓋類は組み合わせる器が特定

できないもののみ独立して扱った。(46、47)は碗の蓋で(47)のほうが時代が下ると考えられる。(48)は空気穴があり水注類の蓋と思われる。小皿(52)の「富貴長命」銘は明末の民窯で使用されたものである。盃洗(56)はほとんど底部のみである。

#### 4 土器、土製品(第12、13図・図版6、7)

土器皿(86)は割れた後に破断部を滑らかに加工して灯明皿に転用している。ごく低い付け高台がある。土人形(96、97)は玩具あるいは信仰の道具といわれる。破損がひどいが、犬と大団天か。江戸遺跡で多く出土する泥面子、焼塩壺は今回は確認されていない。

#### 5 金属製品(第7、12図・図版7)

整理箱に2箱出土した。煙管は7点出土したがうち4点を掲載した。(60)は全体が一体になったタイプである。雁首の形から(57)が(58)より古く、17世紀末から18世紀のものと考えられる。銅製の鏡(62)は玩具と思われるが、堀の根固め杭の上部裏から出土した。簪(64)は頭部が耳かきになっている。槍身(85)は小型の袋槍で木部は失われていた。(84)も同様で、原形はより長いものだったと推定できる。小柄(83)鍔おさえ(80)等とともに、調査区が城跡であることを意識させる遺物である。薬きょう(81)は第2次大戦時以前の物である。古錢は第7図の通りである。2、3が至和元宝、洪武通宝、他は寛永通宝でうち1は背面に「元」、12~21は50~19グリッドより一括して出土した。

#### 6 石製品(第12、13図・図版7)

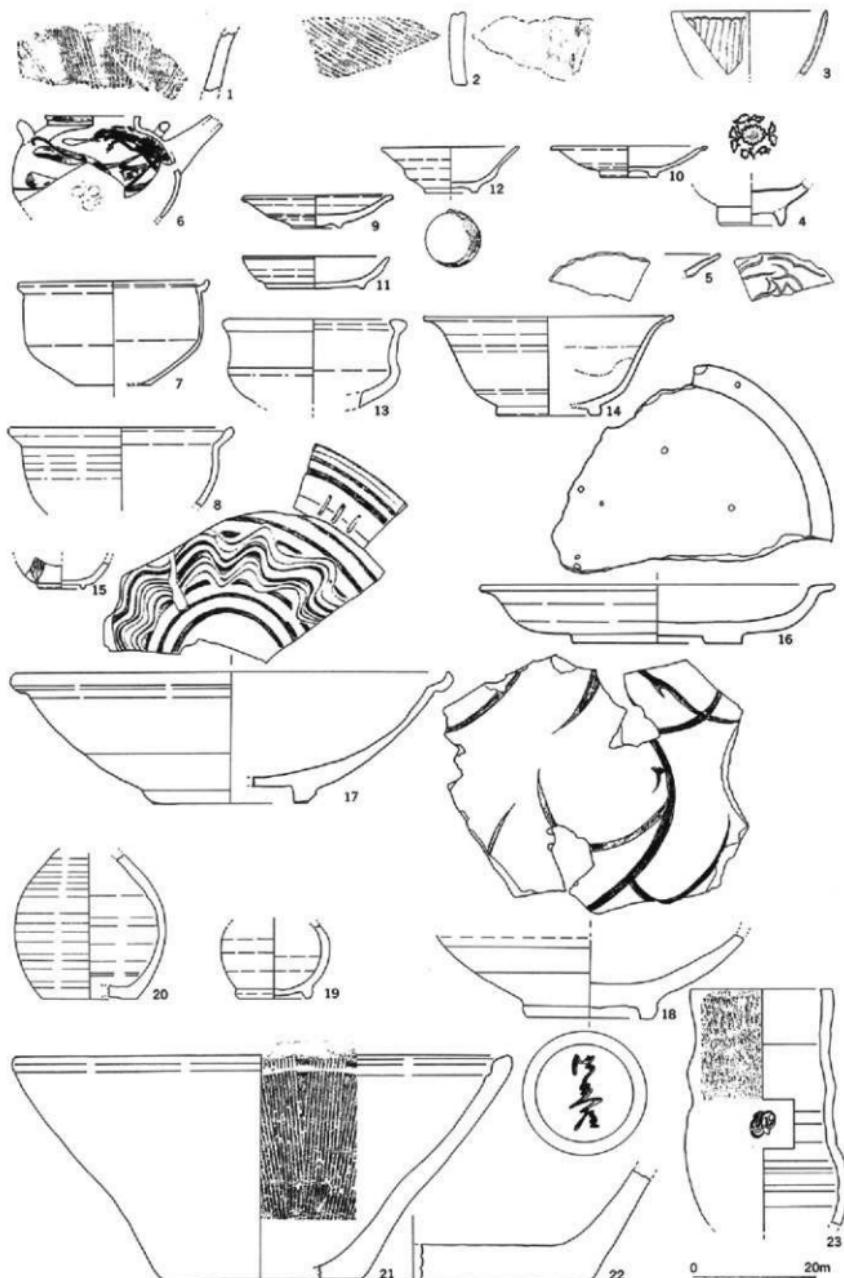
硯(92)、砥石(93~95)が出土している。

#### 7 木製品(第13図・図版8)

杭を除いて整理箱に15箱。(98)は現在と異なり服喪後一定の期間が経つと川などに流す習慣が最近まで見られた地域があったということで位牌としているが、卒塔婆とも考えられる。朱漆に高台内のみ黒漆の椀(99)は木目に対して垂直方向から刺りを入れており高級品と考えられる。全面黒漆に三方円字文の皿(100)は通常通り板材に刺りを入れている。下駄は全部で19点出土しておりそのうちの7点を掲載した。すべて一本から台部と歯を削り出している連歯下駄であるが細部は異なる。踵の部分が小さいもの(104、106、107)は足の前方だけをひっかける構造だったのであろうか。(109)は連歯ではなく差歎の可能性もあるが通常の差歎下駄に比べて台部が高過ぎ、所謂ぱっくり下駄のような物ではないかと思われる。羽子板状板(112)は使途不明である。他にも使途不明の木片は数多い。

#### 8 その他の遺物

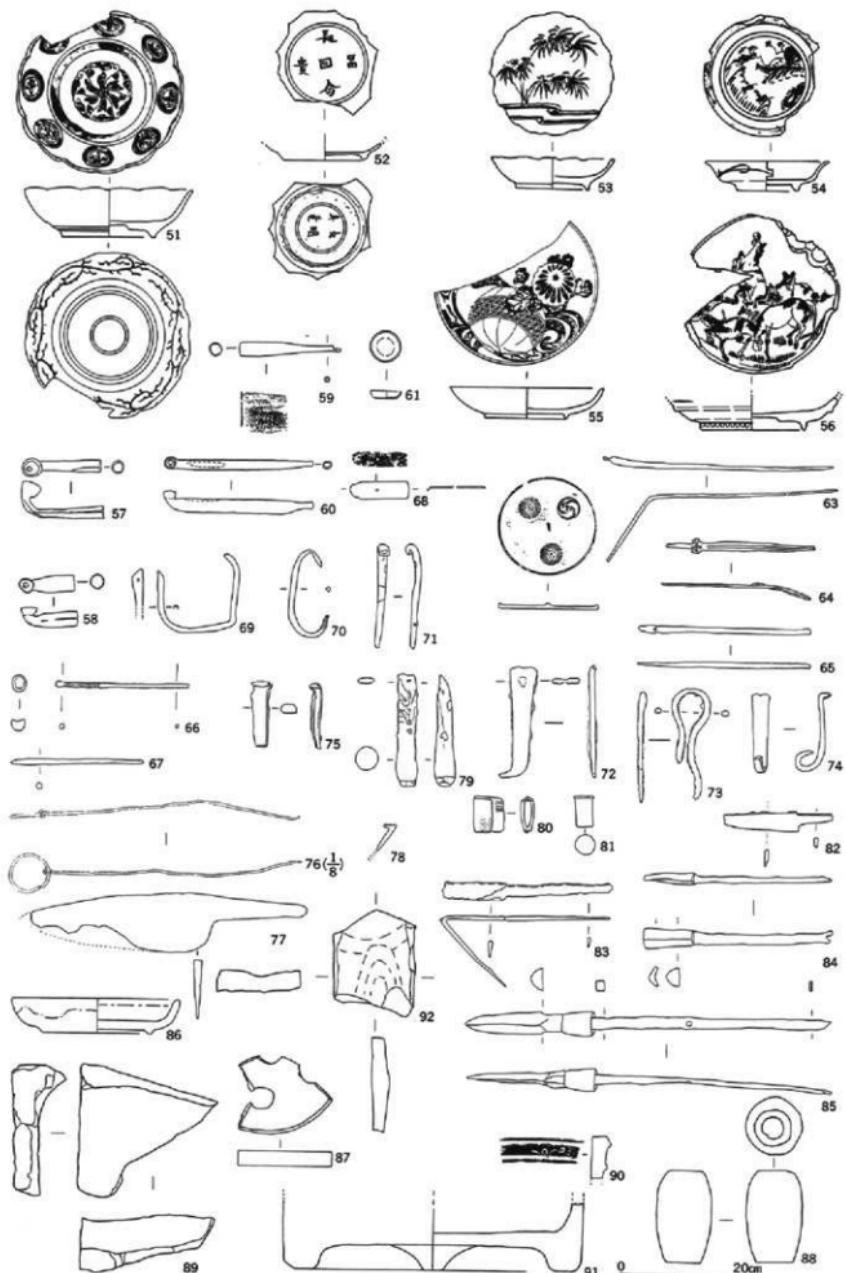
瓦9箱(旧制酒田中学校校舎のもの)。目薬の瓶、ワインボトル等のガラス製品。動物遺存体としてヒト、ニホンザル、カモシカ、ウマ、ガン、淡水に住むオオクニシ、汽水のヤマトシジミ、海水のハマグリ、バイ、サザエ、ツメカガイ、マガキ、種不明の魚鱗、種子としてオニグルミ、ヒメグルミ、モモ、キュウリ属メロン仲間、サクラ属サクラ節、クヌギ近似種が出土した。このなかでもモモ、キュウリ属メロン仲間、サクラ属サクラ節について食とされている種類(サクランボ等)に類似している。オニグルミにも人為的な割跡が認められた。(動物遺存体、種子については鈴バレオ・ラボの報告書を要約)



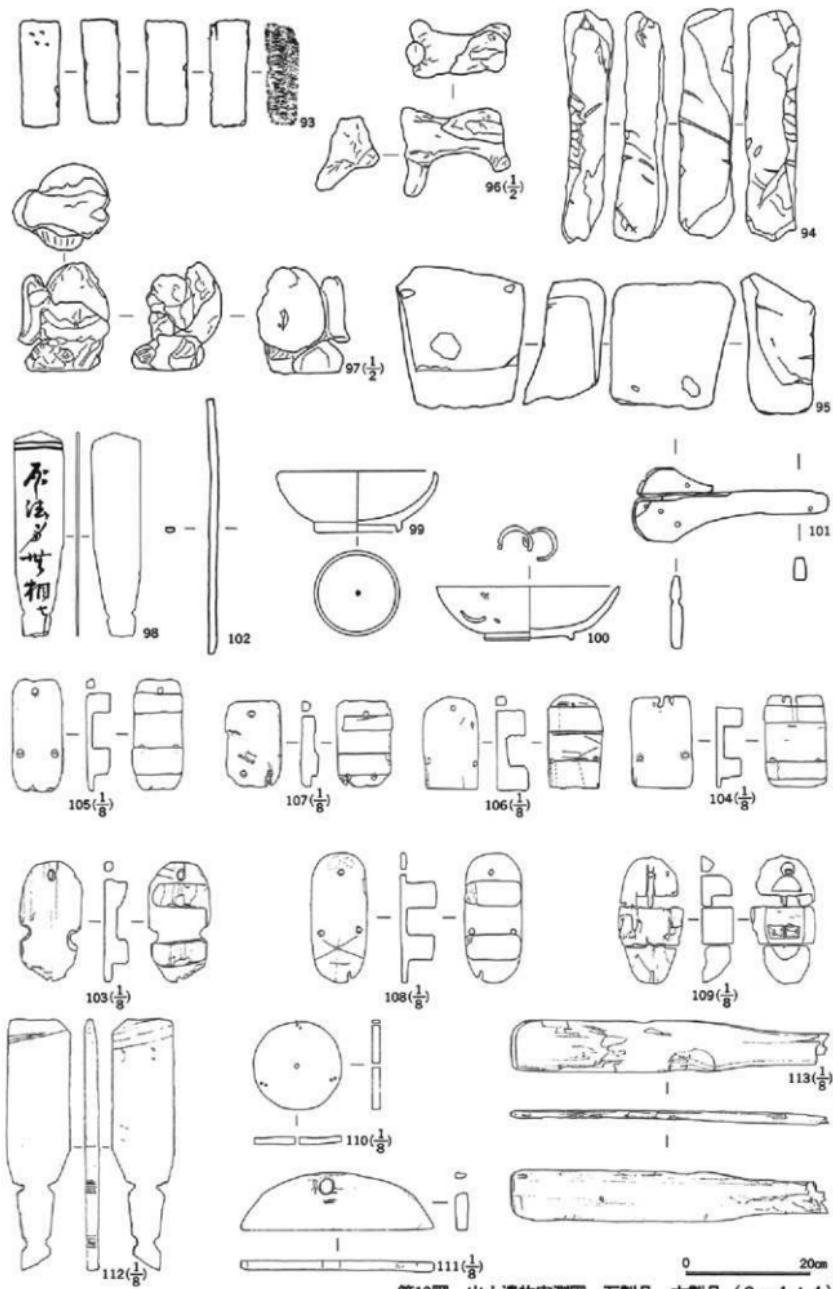
第10図 出土遺物実測図 陶器 (S = 1 : 4)



第11図 出土遺物実測図 磁器 (S = 1 : 4)



第12図 出土遺物実測図 磁器、金属製品、土製品、石製品 (S = 1 : 4)



第13図 出土遺物実測図 石製品、木製品 (S = 1 : 4)

表3 出土遺物観察表(1)

周 齢 種		出土地点	種別器種	形狀特徵	法 量 (mm) □径 底径 壁厚 勾通孔	重 量 (g)	形 成	粘土色	表 面 印 跡 素材 輪面 文様 の 他	製作年代 製 作 地	
序 番 号	年 代										
1	51~17Ⅲ SD 1	陶器 極厚				(167)	ロクロナ テラコッタ	褐色灰土	輪目 8 条 1 単位 RP12	越前	
2	54~10Ⅷ SD 1	陶器 瓢				81	アテ テラコッタ	褐色 茶色	輪模壓め杭の根元より出土 RP31	14C~15C 難波系	
3	中央トレンチ	陶器 瓢		126		15	N 7/0	褐色 茶色	輪模壓め杭の根元より出土 RP31	中世系 難波系	
4	54~12ⅩI SD 1	磁器 足		57		167	N 7/0	褐色 茶色	輪模壓め杭の根元より出土 RP31	12C~13C 中世系 難波系	
5	54~8Ⅺ SD 1	陶器 盆		120	(18)	26	N 6/0	褐色 茶色	輪模壓め杭の根元より出土 RP31	15C~16C 中国系 難波系	
6	XO	陶器 土瓶		76	(85) 140	194	ロクロ 茶	褐色 茶色	透明釉 灰松紋 緑釉	19C 大坂相馬系	
7	53~8 Ⅱ	陶器 土鍋		154 (60) (65)	89	*	灰 色	外 鉄輪 底部無輪	内 灰色釉	在地系	
8	54~9 Ⅳ SD 1	陶器 土鍋		184	(65)	117	茶 色	内緑釉 外緑釉(上面のみ 効了底に火にあつた跡)		19C 中~末期 難波系	
9	52~17 Ⅱ	軟質陶器 小皿	折縁形	124	40 27	51	*	白 色	内白色釉(口上部以外) 外白色釉(口上部)	河内系	
10	54~18Ⅸ SD 1	陶器 中皿		124	46 25	120	*	灰 色	乳白色釉 花口入 瓜を受けた部分に 黒褐色 花口の内側に黒褐色を底	19C 難波系 南洋津	
11	54~16Ⅸ SD 1	陶器 中皿	端反形	120	89 26	61	*	灰茶色	灰釉 瓦入有り 黒ね焼き底	17C 中期 窓戸島美濃系	
12	53~17Ⅸ SD 1	陶器 小鉢		110	45 37	73	*	赤切腹	灰釉 内全釉 外一部 黒ね焼き底 RP24	16C 末~17C 肥前系 南洋津	
13	54~17Ⅸ SD 1	陶器 小鉢		170	(78)	164	ロクロ 茶	薄茶色 茶色	外削毛目大根上 滤縫格子付け 底部無輪 口擦付(口有り) 底部と上部 RPP23	17C 末~18C 未 窓戸島美濃系 現用	
14	52~17 Ⅱ	陶器 中鉢	断形折	206	85 81	88	*	茶 色	研輪 緑釉	19C 窓戸島美濃系	
15	XO	陶器 瓢			35		25	*	灰白色	透明釉 底部無輪 若松文	17C 後~18C 前 肥前系
16	54~7 Ⅱ	陶器 大皿	鋸縁形	290	138 48	661	*	灰 色	京焼風底面	19C 肥前系	
17	54~18Ⅸ SD 1	陶器 大鉢		356	128 107 365	602	*	赤褐色	見込み砂目 7 カ所 瓦入有り RP 3	19C 肥前系	
18	54~9 Ⅸ SD 1	陶器 大皿			104	1,038	*	茶 色	内内外化粧土 透明釉 萬葉文	18C 前 肥前系 南洋津	
19	54~13ⅩI SD 1	陶器 瓢			60	90	78	*	灰 色	内素燒き 外鉄輪	肥前系 南洋津
20	54~11ⅩI SD 1	陶器 油壺			38 (120)	124	174	*	茶色 砂質	外鉄輪構に織 内上面繪 RP27	18C 前 肥前系
21	50~7 Ⅵ	陶器 滴鉢		414	166 181	4,621	*	灰白色	輪目 10 条 1 単位 RP29	16C 末~17C 未 肥前系	
22	54~8 Ⅷ SD 1	陶器 瓢			294		1,049	*	茶 色	輪模後火を受けている RPP26	16C 以前 肥前系
23	53~7 Ⅱ	陶器 花受け			116 (195)	987	灰白色	内鉄輪 外網り柄 純形飾り RP2	内鉄輪 外網り柄 純形飾り RP2	16C 以前 肥前系	
24	54~13ⅩI SD 1	磁器 小杯	端反形	62	28 41	41	*	白 色	外斜付 草花文と異体字	18C 肥前系	
25	52~7 Ⅱ	磁器 小碗	丸形	86	39 40	12	*	灰白色	外色絵	肥前系	
26	XO	磁器 小碗	端反形	82	39 41.5	48	*	白色	外色絵 草花文	18C 後 肥前系	
27	49~18	磁器 大碗	丸形	152		13	*	白色	柴付 内環塙文	18C 後 肥前系	
28	54~16Ⅸ SD 1	磁器 小碗	丸形	84	32 51	41	*	灰 色	柴付 外水割物草花文 くらわんか里 見込み刷し等 砂底	18C 前或後見 肥前系	
29	54~9 Ⅷ SD 1	磁器 小碗	丸形	80	64 60 82	13	*	灰白色	柴付 外梅文	17C 中~18C 未 肥前系	
30	XO	磁器 中碗	端反形	106	41 60	40	*	白 色	柴付 内當文 外鳥文	18C 後 肥前系	
31	XO	磁器 瓢			44		52	*	白 色	裏模金子内模 外青釉飾 見込み五糸文 金子コニャク装 直筒内「太陽年製」墨丸	17C 后~18C 未 肥前系
32	XO	磁器 小碗	丸形	102	32 54	102	*	白 色	柴付 内松葉模 等 外海辺に盤二方 見込み刷し等	18C~19C 肥前系	
33	53~8 Ⅱ	磁器 中碗	端反形	124	40 59	149	*	白 色	柴付 外草文三文式 見込み花 くらわんか茶碗	19C 前~中 肥前系或後見	
34	XO	磁器 中碗	端反形	110	(47)	41	*	灰白色	柴付 内重文花 外花文 くらわんか茶碗	19C 中 肥前系或後見	
35	XO	磁器 水滴				39	彫押し 白 色	柴付 布目	18C 中~19C 中 肥前系		
36	XO	磁器 水滴			47 (43)	37	ロクロ 白 色	青色釉			
37	中央トレンチ	磁器 水滴				11	*	灰 色	柴付	肥前系	
38	54~13ⅩI SD 1	磁器 水滴				12	*	白 色	色絵	肥前系	
39	XO	磁器 肥利			38		19	*	灰白色	19C 前 肥前系	
40	54~8 Ⅷ SD 1	磁器 戸車			44 (3)	13	*	白 色	白紙	19C 前 肥前系	
41	52~7 Ⅲ	磁器 木桶		182	(32)	32	*	白 色	羅網輪	19C 肥前系	
42	54~10ⅩI SD 1	磁器 煙灰具		28	28 24	15	*	白 色	柴付 草支	南戸島美濃系	
43	52~9	陶器 煙灰具			46	38 15	21	*	白 色		
44	51~9	陶器 煙灰具			39	22 37 32	32	ロクロ 白 色	白磁		
45	54~16Ⅸ SD 1	磁器 煙灰具	輪花	23	(20)	10	*	彫押し 白 色	白磁 内菊形押し		

表4 出土遺物観察表(2)

博 雷 号	出土地点	種別	形状特徴	法量 (mm) □径 厚さ 高さ 大さ	重量 (g)	形 成	胎土色	波打 印 路 窓台 輪文 文様 その他			製作年代 製 作 地							
								内四方陣 外方陣	見込み窓 蓋	内四方陣に署 見込み印唇 蓋文中に愛形字								
11 国	46 53-16 II	磁器 蓋		104 50 32	70	ロクロ	白色	輪付 内四方陣	見込み窓		17C末~18C末 肥前系							
	47 52-13	磁器 蓋		104 65 25	67	*	灰白色	輪付 外方蓋に署	見込み印唇	蓋文中に愛形字	肥前系							
	48 54-14 VI SD 1	磁器 蓋	縦 48	11	6	*	白色	輪付 口縁部輪突げ	外松葉		18C後~19C 肥前系							
	49 XO	磁器 蓋	54	11	21	*	白色	輪付 外水割菊花文	口縁部輪突げ		肥前系							
	50 53-8 II	磁器 蓋		191 80 57	203	*	白色	輪付 発草花文			19C~ 肥前系							
	51 53-9 II	磁器 中皿	輪花	138 76 38	191	*	白色	輪付 内外春手文	見込み花文	外松葉	17C後~18C後 肥前系							
	52 54-16 VIII SD 1	磁器 盆		66 (15)	51	白色	輪付 見込み 黄高台	白松葉	高台内	17C後 中國系								
	53 54-8 III SD 1	磁器 小皿	輪花	100 60 25	116	ロクロ	白色	輪付 黄高台	白松葉	高台内	明の底盤が 輪付と流れ くわんかかは							
	54 XO	磁器 小皿	腹重里	100 52 24	80	*	白色	輪付 内松に粉	外松葉三芳	曲襷足の脚	17C後~18C初 肥前系							
	55 53-16	磁器 小皿		126 68 25	85	*	白色	輪付 内菊と脚			19C 頬三歩道系							
	56 51-10 II	磁器 盆洗		84 (27)	177	*	乳灰色	輪付 見込み脚と草	靴	脚	18C 肥前系							
	86 48-7 V	土器 中皿		138 98 29	142		茶色	口縁部に輝	灯火具に転用か。									
	87 54-13 VI SD 1	土器 七輪きな		63	厚さ 12	54		茶色	削られた面に加工跡	RP20	在地							
	89 53-8 II	炻器 行火		(118)	194	板作り	所白色											
	90 中央トレンチ	炻器 風炉			48		灰色											
	91 53-7 II	炻器 炉床		244	239		茶色											
金属製品																		
第 部	出土地点	種 類	材 質	法量 (mm) 幅 長さ 厚さ	重 量 (g)	備 考	博 雷 号	出土地点	器 種	法量 (mm) 長さ 幅 厚さ	重 量 (g)	備 考						
	57 54-8 IV SD 1	管状	銅	火薬筒 径12 65 厚さ8	8	RM11	98 51-7 V SD 1	木製品 本体	木製品 本体	167 40 3	12	墨書き RW171						
	58 54-12 VI SD 1	管状	銅	火薬筒 径11 43 厚さ8	8		99 51-7 V SD 1	木製品 口徑底座	木製品 口徑底座	134 72 51	125	朱漆内黒漆赤点 RW36						
	59 54-9 VI SD 1	管状	銅	(80) + 厚さ2	9	裏面に模様	100 51-7 V SD 1	木製品 中盤	木製品 中盤	152 75 44	106	全面墨塗、三方に文様 RW35						
	60 54-12 VIII SD 1	管状	銅	9 122 厚さ7	27	一体型	101 49-8 V SD 1	木製品 底	木製品 底	160 60 9	32	全面墨塗 RW34						
	61 XO	灰蒸とし	銅	口徑 26	6	8	102 54-17 II SD 1	木製品 蓋	木製品 蓋	28 6 4	4	RW 1						
	62 53-8 V SD 1	鍵	銅	80	5	69	103 XO	木製品 下駄	木製品 下駄	194 102 52	346	通衢下駄 RW 6						
	63 50-13 VIII SD 1	鍵	銅	216 大幅 5	14	RM13	104 49-16 VI SD 1	木製品 下駄	木製品 下駄	149 101 40	351	通衢下駄 RW109						
	64 XO	鍵	銅	123 厚さ5	5		105 49-17 VI SD 1	木製品 下駄	木製品 下駄	180 81 39	358	通衢下駄 RW43						
	65 54-7 IV SD 1	鍵	銅	(148) 大幅 6	9	RM 8	106 51-16 VI SD 1	木製品 下駄	木製品 下駄	148 90 52	526	通衢下駄 RW114						
	66 54-9 VI SD 1	火箸	銅	往 120	15	頭部に羽 金具付き	107 49-7 VI SD 1	木製品 下駄	木製品 下駄	140 92 30	211	通衢下駄 RW111						
	67 49-12 II	火箸	銅	* (107) 厚さ4.5	9	先端欠損	108 48-15	木製品 下駄	木製品 下駄	218 94 60	559	通衢下駄 RW 4						
	68 49-9 II	飾り金具	銅	14 48 厚さ4	4	RM 2	109 49-9 V SD 1	木製品 下駄	木製品 下駄	205 105 50	483	ぼっく下駄 RW41						
12 国	69 54-9 IV SD 1	金具	銅	8.5 167	4	11	110 50-8 V SD 1	木製品 脚	木製品 脚	145	11	180 RW113						
	70 54-9 VI SD 1	取扱	鉄	72 132	9	3	111 51-7 V SD 1	木製品 脚	木製品 脚	316	93	362 RW40						
	71 54-8 VI SD 1	釘	鉄	* 縦 10 85 5	12		112 49-13 IV SD 1	羽根板 状板	羽根板 状板	412.5	103	585 RW131						
	72 54-12 VI SD 1	用途不明	鉄	31 91 4	3		113 48-13 III SD 1	木製品 脚	木製品 脚	517	85	580 RW 3						
	73 54-11 VI SD 1	用途不明	鉄	* * * 6	13		石製品 土製品											
	74 S2-8	用途不明	鉄	15 高さ 64 5	22		88 54-8 IV SD 1	土製品 上鉢	土製品 上鉢	74	45.5 17	153	RP19					
	75 54-14 VI SD 1	釘	鉄	縦 横 13 4.5	13		92 53-8 III SD 1	石製品 底	石製品 底	87	78	25	RQ 1					
	76 54-16 VI SD 1	自在脚	鉄	65 477	4	39	93 52-8 IV SD 1	石製品 底	石製品 底	82	29	32	RQ18					
	77 52-12	包丁	鉄	(49) 233	7	118	94 54-18 VI SD 1	石製品 底	石製品 底	185	47	43	434					
	78 54-9 VII SD 1	鉄納	鉄	後 65.5	63		95 54-7 IV SD 1	石製品 底	石製品 底	104	115 62	808	RQ17					
	79 54-8	鑿の先	鉄	縦 横 92 18 19	72		96 54-19 IV SD 1	土製品 人形	土製品 人形	36	42.5 28	17	動物(大鳥) 人形 18C後 肥前系					
	80 52-9	脚押さえ		11 25 29	15		97 54-8 IV SD 1	土製品 人形	土製品 人形	44	38 36	33	大黒天 18C後半~ 19C RP16					
	81 54-11	箒きょう	鉄	口徑 17 26	5													
	82 53-8 IV SD 1	刀子	鉄	4 (88) 13	10	RM 3												
	83 XO	小柄	鉄	高さ 13 210	27													
	84 51-7 VI	鏡身	鉄	17 (150) 10	47	RM16												
	85 48-8 V	鏡身	鉄	18 310 10	91	RM12												

## V 調査のまとめ

本遺跡の発掘調査は県立高等学校校舎等整備事業の実習室建設に係わる緊急発掘調査であった。調査の主な成果を次にまとめる。

1 調査の結果内堀と見られる溝跡1、土壤1、旧制酒田中学校校舎土台跡を検出し、陶磁器、木製品、金属製品等の遺物が数多く出土した。内堀の確認によってこれまで行われてきた調査の調査区が亀ヶ崎城内においてどの位置にあたるかという推定がいっそう確かになり、堀の向きやその構造にも新しい発見があった。

2 本調査区を含む亀ヶ崎城跡は幕末廃城の後、しばらく官地であったが明治13年(1880)民間に払い下げられ畠地となっており、その後大正9年(1920)旧制酒田中学校校舎建築が行われている。I、II層は校舎建築の影響を受けており、III、IV層は明治初期の埋め立て跡および畠地の跡と考えられる。IV層より出土した木の根は畠地の面にあたる。

3 酒田東高所有の鳥瞰絵図には、家老屋敷の堀と内堀の間に小道と馬場が描かれている。このことから堀のそばの綺麗な地面は馬場の跡であり、調査区の西外の小道との間に廃棄場所となる湿地が存在したとも考えられる。埋め立てられていた壁材などは家老屋敷側の堀ではないかと考えられる。亀ヶ崎城は大火や地震等で何度か被害を受けているが、出土した木材などに焼けた跡が見られず、廃城後の取り壊しによるもの可能性が高い。

4 層序との関連からII層までと堀の上層遺物は明治初期に廃棄された可能性が高い。一方西側のV層以下の遺物は亀ヶ崎城が居城として機能した江戸時代の廃棄物であると考えられる。堀の下部に近いところは双方の遺物の存在していると思われる。堀の底近くから中国産青磁や中世陶器が出土し、亀ヶ崎城が近世以前に廃城の可能性を感じられるが、それに伴う遺構は検出されなかった。

5 陶磁器の製作年代は上記の遺物を除けば17世紀から19世紀のものがほとんどを占める。II層までと堀の上層遺物には19世紀と思われる遺物のほとんどが含まれる。(中には近代、現代と言える遺物も存在した)

6 陶磁器の産地は前回の調査と同様に、肥前系の占める割合がきわめて多かった。日本海をその媒介とする交易の活発さが改めて立証されることになる。しかしこの場所は城内で家老屋敷のそばであったことを考えると、遺物の多くは上級武士の生活の様子を表すものと判断される。

### 参考文献

- 佐藤正徳他「亀ヶ崎城跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第169集 1991年
- 野尻、他「亀ヶ崎城跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター 調査報告書第17集 1994年
- 新宿区内藤町遺跡調査会「内藤町遺跡発掘調査報告書」1992年
- 新宿区内藤町遺跡調査会「新宿内藤町遺跡に見る江戸の生きものと暮らし」1993年
- 新宿区厚生部遺跡調査会「駒込町遺跡発掘調査報告書」1992年
- 東京都埋蔵文化財センター「丸ノ内三丁目遺跡発掘調査報告書」東京都埋蔵文化財センター調査報告第17集 1994年
- 宮城県教育委員会「上野宿跡—近世次庭氏居館跡発掘調査報告書」1993年
- 大橋康二「考古学ライブラリー—55『肥前陶磁』 ニューサイエンス社 1993年
- 黒崎正義「江戸発掘」名著出版社 1995年
- 酒田市史編纂会「酒田市史」1989年
- 山形県史編集委員会「山形県史」1989年

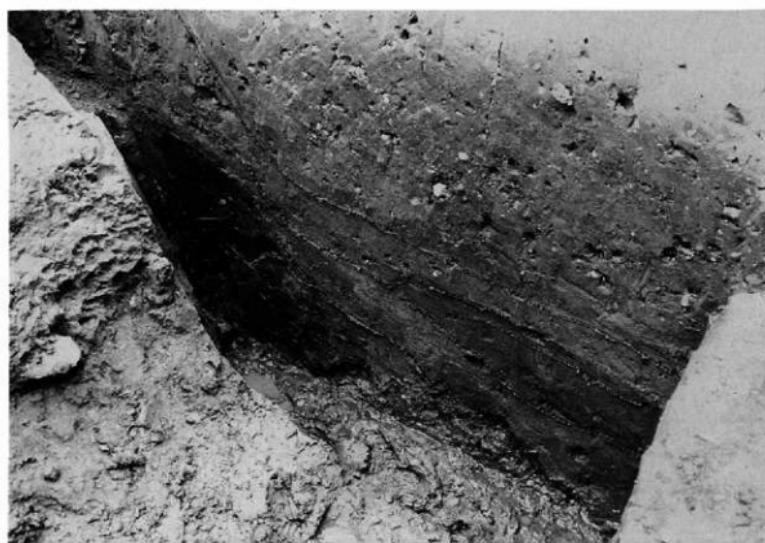
## 報告書抄録

ふりがな	かめがさきじょうあとだい3じはくつちょうさほうこくしょ							
書名	亀ヶ崎城跡第3次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第28集							
編集者名	小関真司							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301							
発行月日	西暦 1995年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
亀ヶ崎城跡	山形県酒田市亀ヶ崎	6204	2071	38度 55分 5秒	139度 51分 3秒	19940621～ 19940812	600	県立高等学 校校舎等整 備事業(実習 室)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
亀ヶ崎城跡	城館跡	江戸時代	堀跡 土壙	1条 1基	近世陶磁器	本丸と二の丸を隔てる 内堀を確認		
					陶器(碗、皿、鉢、甕、壺) 磁器(碗、皿、壺、盃洗) 石製品(硯、砥石) 木製品(箸、椀、下駄) 金具製品(槍身、煙管)	近世陶磁器、槍身等の金 属製品、下駄等の木製品 が多数出土。日本海交易 の繁栄、上級武士の生活 の様子がしのばれる。		

図 版



堀の根がため杭列（東より）



堀の断面層序（南より）



中央トレンチ断面層序（南西より）



堀の根がため杭としがらみ



木の根と木舞



旧制酒田中学校校舎土台（西より）



調査作業状況



SK 4土壤



西側壁材と柱材



RP 16人形出土状況



RP 11皿出土状況



RM 12槍身出土状況



RM 6-1~10古銭出土状況

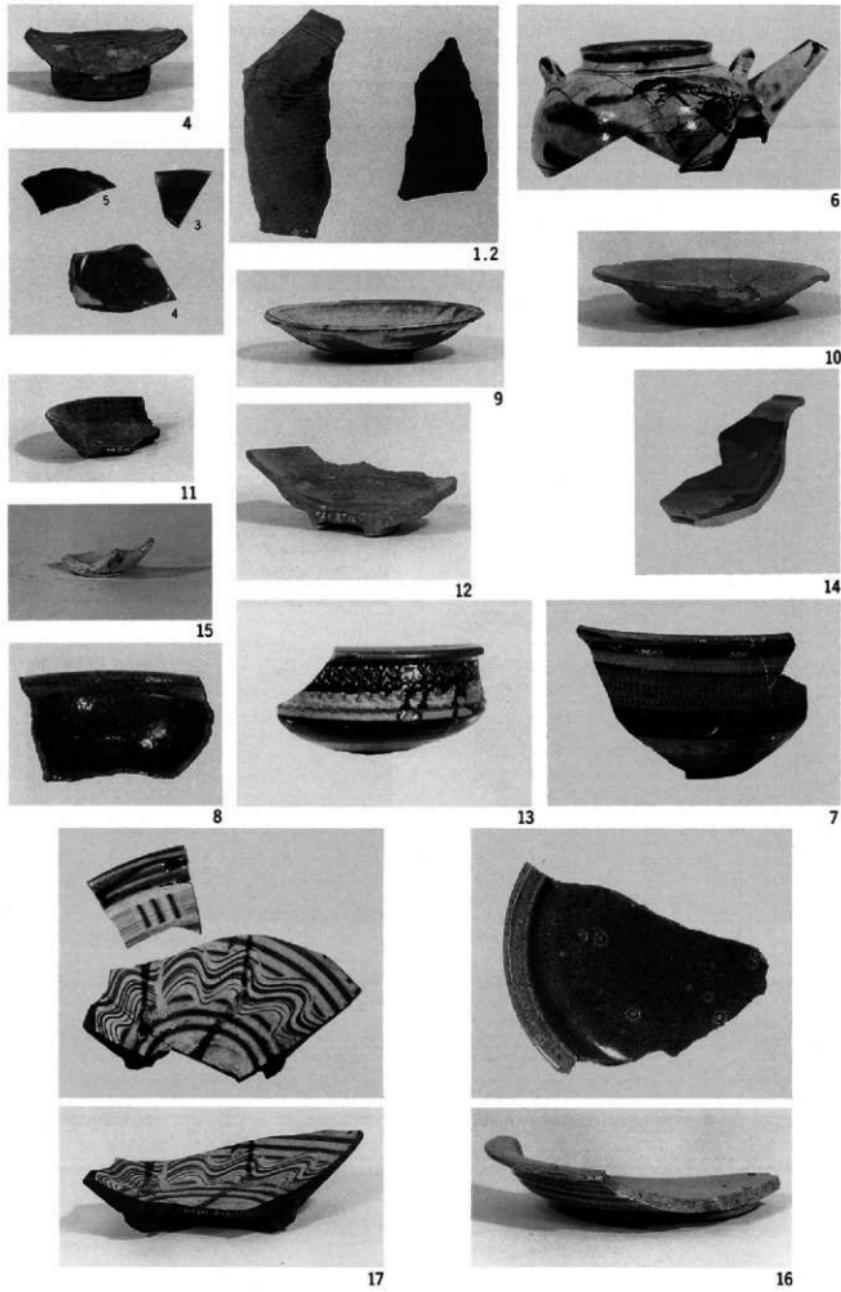


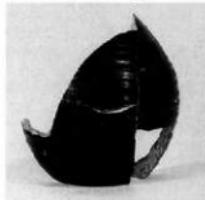
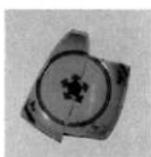
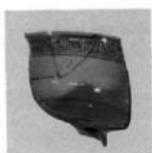
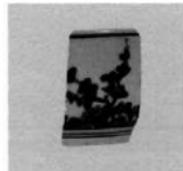
RW 36木椀出土状況



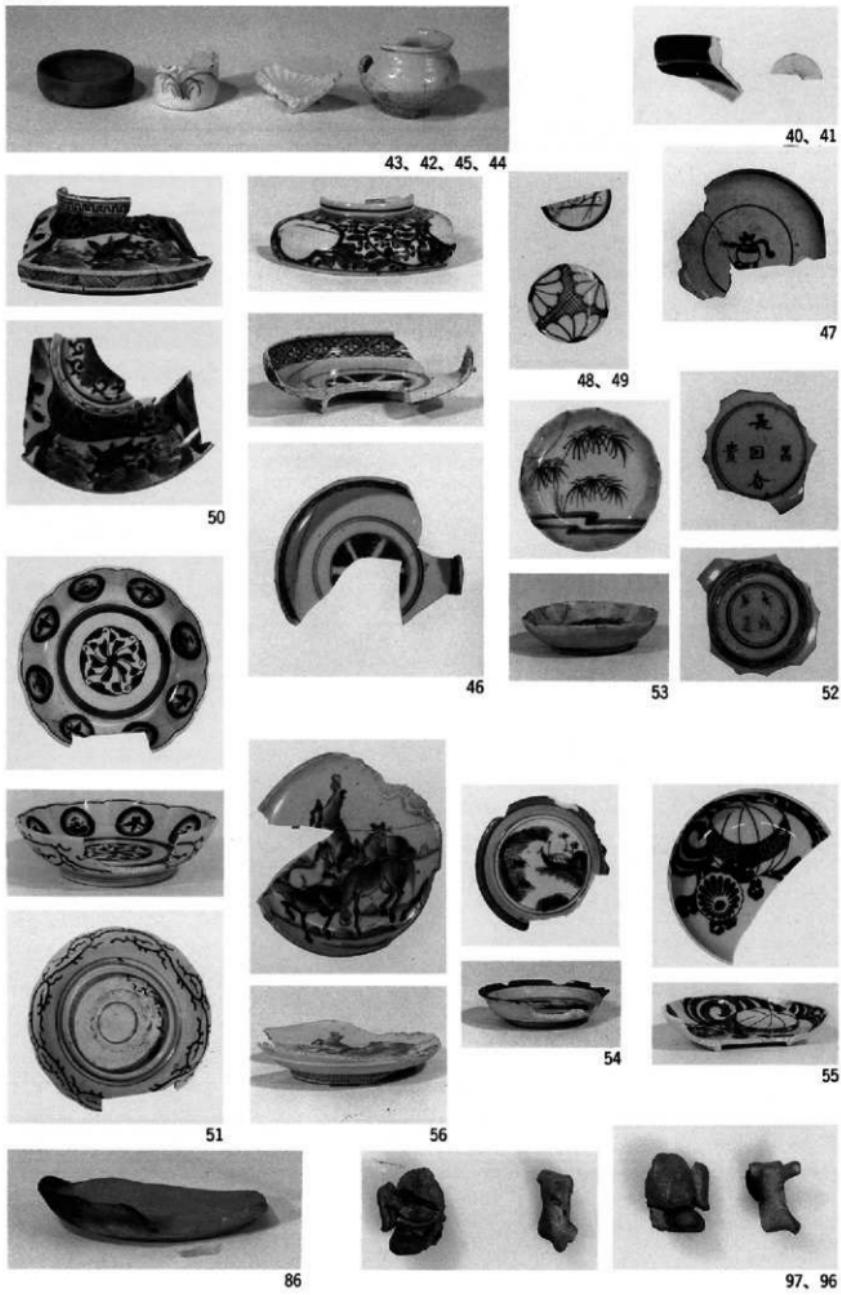
現地調査説明会状況

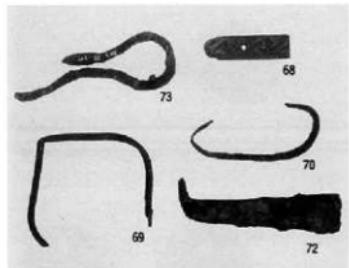
図版 4



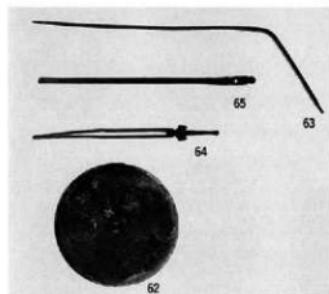


图版 6

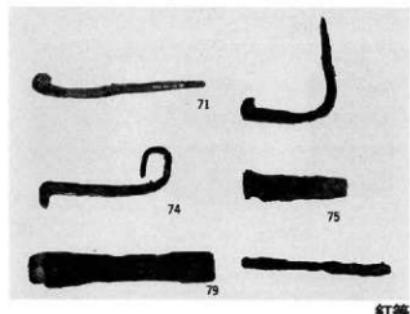




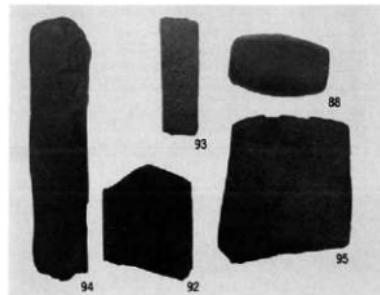
金具



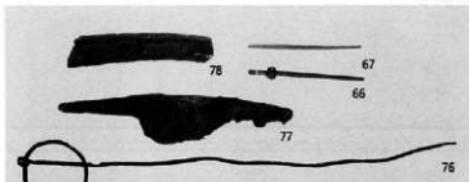
總管



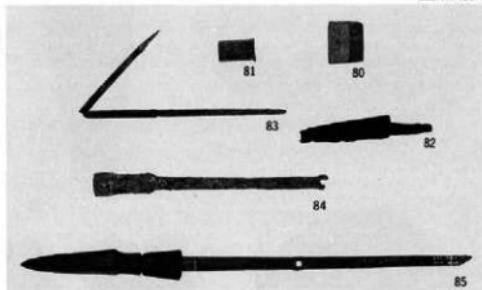
幻等



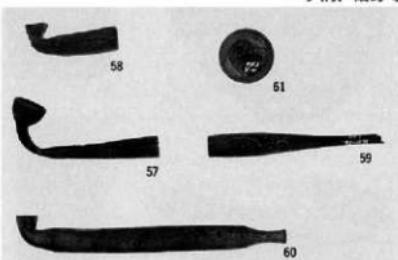
94



生活用具



小柄、槍身等



烟管



91

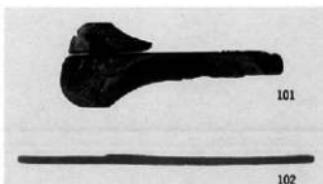
図版 8



100



98

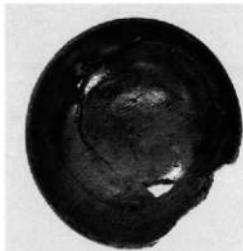


101

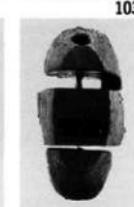
102



103



104



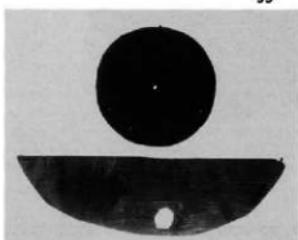
105



106



107



99



110



109



112



113

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第28集

亀ヶ崎城跡第3次発掘調査報告書

1995年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 0236-72-5301

印刷 株式会社 大風印刷

---